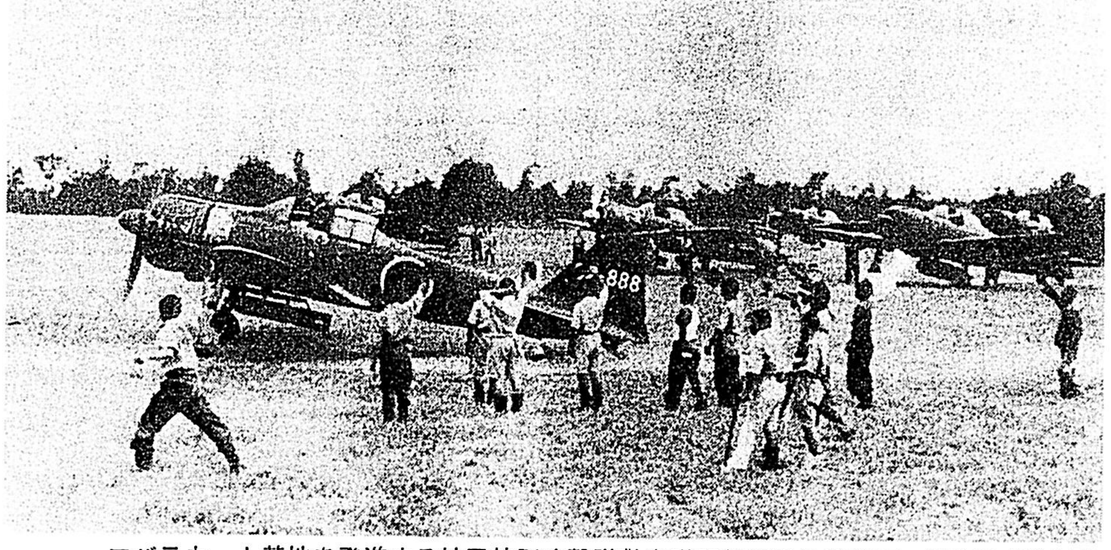
平成十七年六月十七日 発行
「翼」初夏号（No.76）
〔禁・無断転載〕（非売品）
発行 航空自衛隊連合幹部会

銃後少年と特攻



マバラカット基地を発進する神風特別攻撃隊敷島隊関行男隊長機以下の爆装零式戦闘機
（「関大尉を知っていますか」光人社より）

劇作家・俳優
中城まさお

昭和十九年の十一月以降、B29の大編隊はよく晴れた日の白昼飛来した。ぼくは五中（現小石川高校）に通う中学一年生だった。空襲警報が鳴り、やがて南ないし西の空から編隊が姿を現すと、それはいまいましいほど美しく、銀色に輝き渡っていた。たいていは友軍機の迎撃は間に合わず、何一つさえぎるものない大空を扇がたの隊伍を組んだ彼等はゆっくりと移動して行った。ところがその日は何機かの友軍戦闘機が迎撃に飛び立っていた。高度一万メートルに達するには新鋭機でなければならず、また数十分前から発進していなければならなかった。豆粒ぐらいに見える戦闘機が大編隊に近付いては、きらりと光って離脱して行く。地上には緊迫感は伝わらず、舞を舞うような優雅な動きに見えた。そのうちの一機がナイフで突き刺すように斜め上方から接近し、そのままB29の胴体に馬乗りになった。実際には鋭く突き刺さる体当たりだったのだろうが地上からはふんわりとおんぶしたように見えた。

その後両機ともども高度を下げ視界から消えて行った。なおも呆けたように空を見続ける中学生のかたわらにコツンと音を立ててジュラルミンの破片が落ちた。こわごわ拾い上げると、赤い血が付いたさしわたし五センチメートルほどの小片だった。ぼくはそれによってはじめて壮烈な体当たり攻撃を実感した。家に入り、神棚に捧げ、手を合せた。破片はぼくに語りかけた。

「そうだよ、ぼくだよ。さっきまで紫電改（注1）を乗りまわしていたぼくだよ。君たちの上に爆弾や焼夷弾をばらまくB29に一矢むくいてやった。奴はすぐには落ちなかったが、太平洋のかなたの基地まではたどりつけないさ。明日また空襲がくり返されても一機は数が減っているだろう。ぼくはそれで満足だ。ぼくは自分にやれる事をやったまでだ。いつかきっと君たちがあとに続く事を信じている。君たちに体当たりをやれと言うのではない。日本の国を守るために働いてくれればいい。日本の不滅を信じている。さようなら祖国。さようなら家族。そして君たち。さようなら……」

筆者の中学受験写真

東京空襲が激しさを増し、昭和二十年三月東京下町の壊滅があって、ぼくは母の郷里福島県郡山市に疎開し、安積（あさか）中（現安積高校）に転入した。郡山近郊には陸海軍の航空基地があり、特に海軍のそれからは連日黄色い複葉の練習機、通称赤とんぼが舞い上り、市の上空を飛びかっていた。或る時期から急降下と、それを立て直すエンジン音の高まりがくり返され、それは特攻の訓練をしているという噂だった。

街なかの何軒かの旧家は、若い飛行練習生たちが休日を過すための休息所を引き受けていた。ぼくの従姉妹の家もその一つだった。連日の猛訓練にもかかわらず若い彼等は実にほがらかで、しかし羽目をはずす事はなく、礼儀正しかった。日曜日には午前中に「ただいまー」と入って来て、夕方「行って来まーす」と出て行った。その食欲は旺盛で、叔母たちは金曜から主食、副食の買い出しに精を出さねばならなかった。従姉妹は小学六年から女学校に進む頃で、器量も良かったので、妹のように可愛がられていたと思う。

時期が来て彼等が郡山を離れる日、転出先は公表されなかったが、間違いなく死地におもむく彼等が、すがすがしい軍装で敬礼する姿に人はみな涙を

禁じえなかった。

話は多少前後するが、昭和十九年十月末の新聞に、神風特別攻撃隊第一隊敷島隊の戦果と関大尉以下五軍神の名が報じられた。

「神鷲の忠烈、万世に燦たり。神風特別攻撃隊敷島隊員、敵艦隊を捕捉し必死必中の体当たり」

まず考えた事は、ぼくに出来るかという事である。その時点では正直言ってあやふやだった。しかし軍に入って教育され鍛えられれば出来るだろうと思った。それというのも彼等はみな立派にそれをやり遂げている。彼等を尊敬しあこがれているのに尻ごみするようでは、尊敬もあこがれもいい加減なものだという事になる。先ずは軍の学校に入れてもらえるくらいまで精神や肉体を鍛えておく事だ。当時郡山でもいちじるしく食料事情が悪かった。小指のような芋二、三本の朝食を終えてもひもじさはやわらがなかった。しかし毎朝登校前には庭に出て走り高跳びほかの練習にはげんだ。一回跳ぶと目がくらんでへたり込んだ。それでもなるべく早く立ち上がって再挑戦した。記録は容易に伸びず、時には後退した。走り高跳びを選んだのは自分で目印がつけやすかったためだ。

兵学校四号生徒・関行男
（「敷島隊の五人」光人社より）

昭和二十年八月十五日、敗戦の玉音放送。ラジオの受信状態が悪く、陛下のお言葉は聞き取りにくかった。放送が済んだ後も一同様子がわからず黙って座っていた。叔父が誰にともなく低い声で言った。「どうやら日本は敗けたらしい」

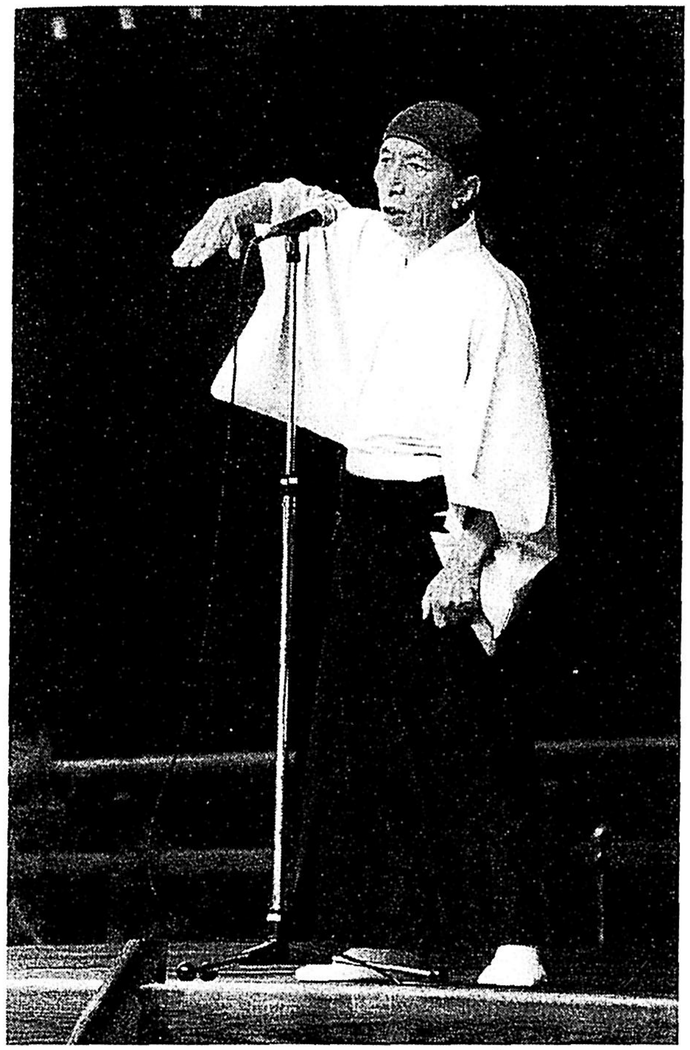
小学校六年生の弟はそれを聞くとワッと泣き出した。ぼくも泣きたかったがなぜか涙は出なかった。泣かない事が申し訳ない事のように思え、泣ける弟がうらやましかった。

占領政策は新聞紙面やラジオ放送に現れた。やがてその効果が顕著になり、占領軍の意向に同調するだけでなく、何もかも日本が悪かったと言う人が増えた。多くの人が東京裁判のまやかしの弁論に引っ掛かった。日本側弁護人清瀬一郎とそれを補佐するアメリカ人弁護人は「裁かれねばならないものがあるとすれば、それは東京大空襲や、広島、長崎原爆投下で何十万もの民間人を殺戮した連合国の側ではないのか」と弁論を展開した。これはこの裁判の拠って立つ基盤を根底から覆すに足るものだったが、何の説明もなく記録から削除されたままである。インドのパール判事の「日本無罪」の判決文は採択されなかった。

言論の自由を標榜するにもかかわら

ずマスコミに対する検閲は容赦なく行われ、時には発行停止を受け、それを境に編集方針が大きく変化した新聞もあった。NHKによる「真相はかうだ」「真相箱」などという旧日本指導者に対する悪口番組が連日流された。信書検閲は無差別のサンプリングで行われ、われわれ子供がやりとりするたわいない私信にまでおよび、封筒の上部や下部がはさみで切り取られ、開封のあとは当時まだ市販されていないセロテープでふさがれていた。

新憲法を含め、日本を弱体化しようという七年間に及ぶ占領はうまく働き過ぎた。占領軍も、まさか何十年先まで日本があの憲法を順守するとは思わなかっただろう。だからと言って、今それらを引き合いに出して反米を主張するつもりはない。「戦勝国というのは所詮そういうもの」であるし、まして半世紀以上経った今でもそれに対する修正がうまく出来ていないのは当時の戦勝国のせいではなく、自分たちの責任なのだ。世に「四十過ぎたら自分の顔には責任を持て」と言うではないか。



靖国神社奉納公演「一人語り『散れ山桜』」
（H15.10.17　靖国神社秋季例大祭、撮影・堀江敬陸）

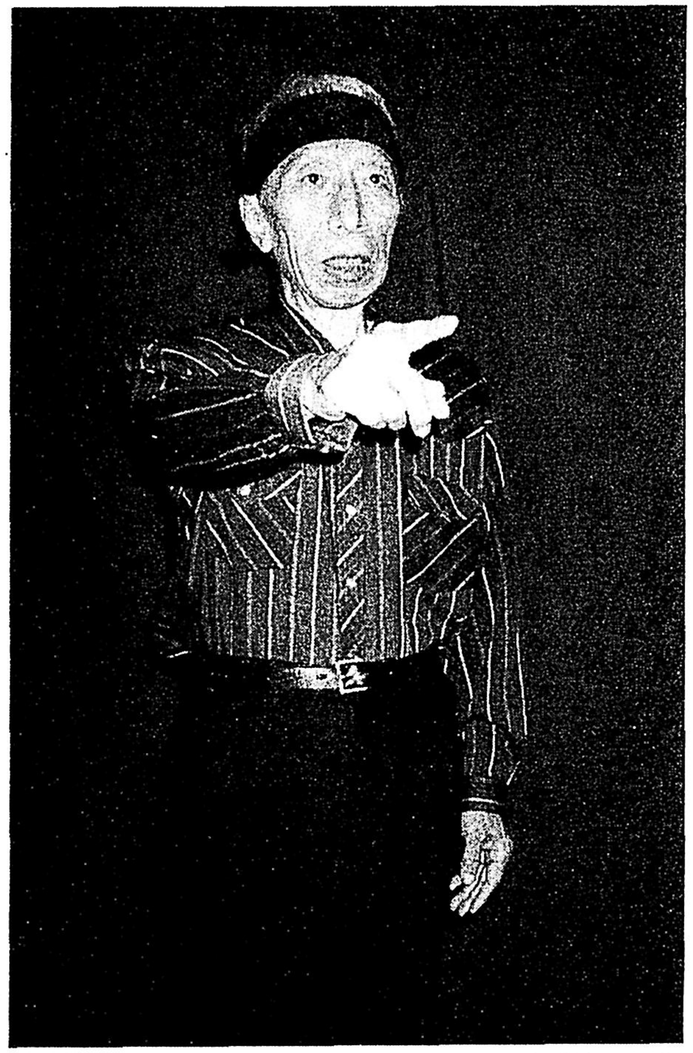
軍国少年は特攻隊の事も軍神関行男の事も忘れてしまった。忘れ物をしている時の何か収まりの悪さを感じながら何十年も時が経った。或る日神田の古本屋を冷やかしていて一冊の本が目についた。「関大尉を知っていますか」という表題だった。J・デルポートというカナダ在住の女性が禅の修行で日本と往復を重ねるうちに、関大尉の事を聞き知り、その霊に取りつかれたようにして書いた作品だった。武士道体現者としての関行男が彼女の魂をゆさぶったに違いない。ぼくはこの書によって再び関行男に出会った。先ず長い忘却を詫び、日本が特攻作戦にかかる前後についての書物をあれこれ探して読みはじめた。草柳大蔵「特攻の思想」（文芸春秋社）は特攻生みの親といわれる大西滝治郎中将の「送り出す側」の論理を追及した書で、特攻が決して安易な思い付きから出た作戦でない事をわからせてくれた。森史朗「敷島隊の五人」（光人社）は多分デルポートさんも目を通しておられる書物だが、関行男の人となりを能うかぎり綿密に調べ上げている。ほかにも猪口力平、中島正、安延多計夫氏など特攻関係の著作はかなり多くあった。

日本はそれ以前はもちろん、これから先も含め、ただ一度のタイミングとしてあの時点を選んだ。そして作戦としての特攻を開始し、十カ月続け、三千余名の隊員が続いた。その第一隊の隊長関行男。この人選は、偶然の配剤とは思えないほど人を得ていた。ほかの人が隊長ではいけなかったと言うつもりはない。当時航空隊の指揮官なら誰だって十分に役をこなしたと思われる。それでもなお敢えてそのように感じさせる何かを関は持っていた。一回の出撃だけでも容易でないのに、三回まで索敵、帰投を繰り返し、悪天候の一日をはさんで五日目、実に四回目の出撃で敵機動部隊を発見、五機そろって体当たりに成功、空母一隻轟沈を含む大戦果を上げた。集中力、不撓不屈の精神、加えるに冷静さ。こういう場合の人選には「一人っ子は列外に出よ」など家庭の事情が斟酌されるケースもあったようだが、彼は一人っ子、故郷に一人暮らす母を残し、当時としては珍しい恋愛結婚の妻帯者、その生活にも三か月で別れを告げ、さまざまな思いを断ち切って突っ込んだ二十三歳の武人に、日本国民すべてが哀悼の意を表した。繰り返し述べるが今の視点で特攻作戦を容認するつもりは毛頭無い。しかし当時の事情、心情を現代人の視点で類推すると、ずれを生ずる。

出撃直前の関行男
（「敷島隊の五人」光人社より）

敗戦と占領。戦争に負けるという事は悲しい事で、「特攻は犬死に」だの「軍上層部の無策の犠牲者」などと蔑まれ、英雄も軍神も消されてしまった。あれだけの国力の差がある敵に対し、ほかにどのような抵抗の手段があったというのか。国力に圧倒的な差があるアメリカと戦争を起こしたのが悪いという人もいるが、アメリカ側の排日運動、数百パーセントという非常識な関税政策、ソ連の脅威に対するルーズベルトほかの理解不足が戦争の要因であり、最終的にはハル・ノートという事実上の宣戦布告を突き付けられた末に突入した戦争であった事は今や世界の常識である。

しかし一方、あの敗戦にも一つだけ救いがあった。それは日本国が亡ぼされなかった事である。ソ連などは日本を分割処分したがっていたようだが、それは食い止められた。日本は国家として残った。降伏の形態について「無条件降伏」という言葉が使われたが、これは軍隊の降伏の事であり、国としては「ポツダム宣言受諾」というれっきとした有条件降伏であった。今でもその辺を誤解している人が多いが、GHQが意図的にこの語を繰り返し使った言葉の詐術である。ともあれ国は残り、国体は守られ、二千数百年続いた歴史は根絶やしにされずに済んだ。これにはいろいろな原因が考えられるが、特攻や玉砕で示した皇軍の徹底抗戦の姿勢が、これ以上日本を痛めつけようとすれば連合軍側も百万単位の戦死者を覚悟せねばならぬと思わせた事が最大の要因になった。物量の差やレーダー等の情報機器の差のために兵たん線が寸断され、想像を絶する飢餓や疫病に苦しみながらも、なおかつ銃を捨てなかった何百万皇軍将兵のふんばりが実を結んだのである。この方々に十分感謝し、慰霊顕彰する事なしに新たな国防を考える事は出来ない。



中城まさお作・演出・出演の一人語り公演『散れ山桜』

第二次大戦の始まる頃ぼくは子供だったが、イギリス首相チェンバレンがコウモリ傘片手にロンドン、ミュンヘン間を往復するニュース映画を覚えている。当時劇映画の上映前には必ずニュース映画を上映したものだ。チェンバレンはヒトラーの下心を甘く見て妥協を望み、ナチスドイツのチェコ侵入を許してしまった。今その轍だけは踏みたくない。独裁政権はかつてナチスがユダヤ人絶滅を目指したように、自国内の結束をはかるために他民族への敵対意識をあおり立てる。今、或る国の政治体制は日本人にあの頃のユダヤ人の役割を振り当てようとしている。あの東京裁判で貧弱な論拠からでっち上げられた南京虐殺事件などの汚名をもとに、反日意識があおり立てられている。民族的な反感というものは増殖をはじめると政府のコントロールも利かなくなる所がこわい。日本は六百数十年前の元寇以来の国難の予兆に目をつぶり続ける事はできない。ローマ帝国末期のように「軍事に目配りをしない政治」は国の滅亡につながる。

その後銃後少年はどうなったか。彼は演劇の道を選んだ。一人芝居などで脚光を浴びかかった事もあったが「関大尉を知っていますか」と出会って勉強し直し、「敷島隊の五人」を原作にして映画シナリオ「散れ山桜」を書き映画化実現に向け鋭意努力をはじめた。今、資金提供者探しに時間がかかっている。

一方、一人芝居の経験を生かして一人語り「散れ山桜」を書き、こちらはすでに各地で上演をくり返している。靖国神社の境内で奉納公演をさせて頂き、ご好評を得た。今後も機会があれば、たとえ小さな会合でも出向いて上演させて頂きたいと思っている。

さらに一方、シナリオから書き改めて、本業の舞台劇で「散れ山桜」を書いた。ここでも資金面が問題だが、映画に比べれば規模が小さくて済むので、遠くない将来に実現すべく動いている。ここでは公演自体を成功させるに止まらず、一つの演劇運動を起こす核にしたい。国の命運が大きく変わろうとする時、演劇の分野で「国民劇」と呼ぶにふさわしい運動が起こり、国の運命にはずみをつける。ドイツのシラーほかの「疾風怒濤の演劇」、アイルランドの「国民演劇運動」など、その例は多い。戦後日本の現代演劇は「私」の掘り起こしに熱心で「公」の視点が極端に少なく、矮小化の一途をたどっている。ここ数十年間では三島由紀夫「鹿鳴館」以外後世に残す作を選ぶのは難しい。気骨ある演劇の仲間と語らって「国民劇運動」を起こすのは今をおいて無いと確信している。多くの方々のお力添えに期待して止まない。

（注1）機種は未確認。
www.geocities.jp/shinkokumingeki

中城まさお（なかじょう・まさお）
一九三一年生まれ。東京大学法学部卒業。在学中「劇研」所属。文学座に二年間在籍、三島由紀夫氏、福田恒存氏から影響を受ける。劇団東宝現代劇を経て独立。前記両氏の作品ほかを上演。一人芝居の全国公演がテレビ、新聞で話題に。作、演出、出演、制作等で七千回以上の公演を行う。自作『古事記』でオーストリアの演劇祭に参加し、クローネンツァイタンク紙ほかでトップ記事に。NHK「朗読の時間」ほかメディア出演多数。関行男のシナリオを書き映画、舞台実現に尽力中。一人語り『散れ山桜』『会津白虎隊』を靖国神社奉納公演のほか各地で公演中。日本劇作家協会会員。新国民劇連盟準備会事務局長。本名・中城正男。